18

No. 11

やまぐち自然派宣言

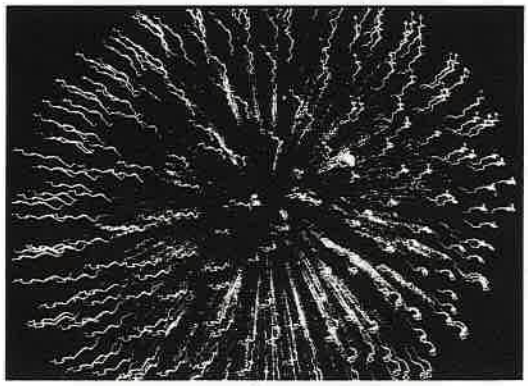
共存から共生へ④

鯨墓と金子みすゞのメッセージから学ぶ

オオサンショウウオの保護活動

生態系探訪

山口県のヤマネの生活



共生

共生随筆

宇部自然保護協会40周年記念企画を終えて
40年から新たな一歩を迎え

ヒゼンマユミが大変だ

県内での自然観察に関わって

冬こそ温暖化対策

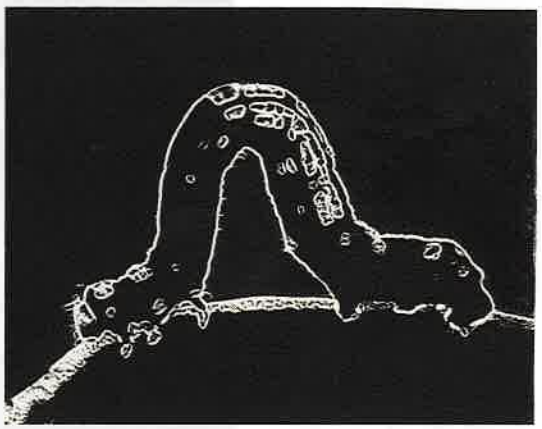
秋吉台の自然歩道の修復から学んだこと

萩でムササビと御対面！
とっておきのムササビ観察会の御案内

少し冒険「危ない」体得（新聞の記事から）

やまぐちの自然景観整備事業

祝　表彰



やまぐち自然共生ネットワーク

平成24年1月30日

共存から共生へ　④

用語の変遷をめぐって

「人間と地球の共生」

人々は長い間、人間と地球の関係にある魅力的な多様性に気づいていた。

・・・・

私としては人間と地球を、絶え間ない適応的変化を遂げて創造の連続的進化のプロセスに寄与し続けるような、多様性に富んだ一つの共生系としてみるほうが、満足出来るのである。

Ｒ デュボス（一九八〇）　長野　啓訳

「いま自然を考える」

―地球への求愛―

一九八三年　思想社

鯨墓と金子みすゞのメッセージから学ぶ

開村修三

この夏、北九州市の方で家内たちの大学の同窓会があり、その研修先として、金子みすゞ館、青海島のくじら資料館を観る機会に出くわした。わざわざ九州より山口県をバス旅行することを企画された幹事の方に敬意を表したい。くじら館では、館長さんが「祝いめでた」「朝のめざめ」の2曲を大きな声で歌ってくださった。この鯨唄は唄う時に鯨に対する恩恵と感謝の気持ちを表すとともに、鯨の死を心から悼んで手を叩かずもみ手で行うことをききました。鯨墓は鯨の胎児70数体が埋葬され、不本意にも母鯨にともなって捕らえざるを得なかった無念を表し「南無阿弥陀仏」の字幕の下に「業尽有情雖放不生、故

宿人天同証仏果」と刻まれていて、その意味は、鯨としての生命は終わり、我等の手によって捕らえられたが、我々の目的は、本来おまえたちの胎児を捕るつもりはない、むしろ海中に逃がしてやりたいのだ、しかし汝独りを海へ放ってやってもとても生きられない、どうぞ憐れな子等よ、我々人間世界の習慣によって念仏回向の功徳を受け諸行無常の諦観というか悟りをもってくれるようお願いする。その読み方は「業尽きし有情を放つと雖も生せず、故に人天に宿して同じく仏果を証しめん」と墓が建って300年経っても毎年鯨の法要が営まれている実態を知り、こういう生き物に対する姿勢が根底に流れていればこそ金子みすゞの詩が生まれる土台があったことを知りました。

小生は、40年近く海に潜り日本各地の海を通して魚たちの世界を見てきた者にとっては、言いようの無い感動を覚えました。タコ一つの観察をしても、一つ一つに個性の違いがあること、網にかかっている魚に対して、その同じ種類の魚が、もがいている魚の目と腸とを食いちぎり、又、次の魚へと移って行く姿を見たり、海の中の世界は神秘に充ちており、サンゴの世界はまるで龍宮城である。山口県は三方海に開いているのであるから、海、川からの恵みを受けると同時に自然体験を通じてもっと海山のことを理解せねばならない。海は山と深い関係の上に立っているのであるから、海山の自然に1人でも多くの人が関心を持って欲しい。金子みすゞの詩の特色として魚側からの視点、今までは顧みられることの無かった人から他でなく、他から人への目線の発想であろうか、詩才の器を論じる資格はもとより小生にはないけれど、視点転換ということはいずれの場においても非常に大切である。科学への探求の姿勢も然り逆境をチャンスと捉えることも然り、そういうことを気付かせてくれたみすゞの詩に感服である。釈迦の話に出てくる六牙の象の話、イエスが自分を十字架へ送り込んだ人々に対して発した言葉にも通じると思われる。

さて次回第9回リレーミーティングin竜王山ではしっかり語り合いましょう。

オオサンショウウオの保護活動

錦川オオサンショウウオの会　白井啓二

岩国市錦町のオオサンショウウオの館に住みついていた、錦町まちぐるみ博物館の一番人気の「ふじちゃん」体長132cm（日本最大級）が亡くなって3年が過ぎました。「まあちゃん」体長126cmは、その前の年に亡くなりました。2匹とも、おそらく100歳を超えていただろうということで、老衰で死んだのだと思います。「ふじちゃん」は骨格標本となって県立博物館に眠っています。昔は町内のどの川でも生息していました。昭和27年に国の特別天然記念物に指定される前までは、家庭の池でペットとして飼育もしていました。また、虚弱体質の栄養剤、精力剤、胃腸薬として食用にもされていました。

オオサンショウウオは生きた化石として知られた日本固有種で、岐阜県、愛知県から西の本州山間部に多く生息していますが、四国や九州の一部でも生息が確認されています。山口県ではほとんどの川で絶滅し、唯一、生息が確認できたのが、錦川の支流の錦町の「宇佐川」です。地元の人は、オオサンショウウオを、ちょくちょく川で見かけていましたが、特別天然記念物ということで、見ても触ってもいけない、ましてや捕獲すれば逮捕されるということで敬遠していました。護岸工事で大きな石や、コンクリートの護岸を撤去した時に、巣穴に潜んでいるオオサンショウウオが出てくることがありましたが、市や県の担当者に連絡すると、すぐにその場に放せということでした。そういうことで、地元の人は、見ても触ってもいけないオオサンショウウオの保護活動はまったくといっていいほどしていませんでした。

山口大学名誉教授の山岡先生と高川学園の村田先生が、平瀬ダム建設に伴うオオサンショウウオの調査に入り、その後、文化庁の許可を得て、高川学園の村田先生と科学部のみなさんが研究調査活動を行い始めました。数年間にわたり、村田先生と科学部のみなさんが、防府市から片道1時間30分かけて宇佐川まで来て調査をしています。オオサンショウウオは夜行性であるため深夜に調査します。夏は、マムシ、ハチに襲われないように注意し、秋には熊に注意し、冬は雪の寒い中、川に入り調査しました。そんな中、地元の川のそばに住んでいらっしゃいます、森田さんが、家を宿舎に解放され、また倉庫を提供し、その都度持って来ていた調査道具や、ウェットスーツなどを保管することができるようになりました。ようやく地元の交流ができるようになりました。森田さんから、錦川流域ネット交流会に連絡があり、オオサンショウウオの保護の会の立ち上げの相談がありました。そのすぐ後に、日本オオサンショウウオの会の全国大会が鳥取県日南町で開催される

ということで、7人で参加しました。高川学園の科学部のみなさんの研究調査活動の発表もありました。全国から保護団体が集まり、活動の報告をされましたが、目からウロコでした。隣県の島根、広島また鳥取、岡山、兵庫、京都、

熱心に保護活動を行っています。岡山県真庭市で全国大会が行われました。オオサンショウウオに関する古い文書なども多く展示してありました。お祭りの大きな山車もオオサンショウウオです。オオサンショウウオ神社もありました。町を挙げての保護活動にはびっくりしました。その後、数回の勉強会や、保護活動の会の立ち上げ準備会などを行い、昨年6月に「錦川オオサンショウウオの会」が発足しました。設立総会には行政、教育、地域振興のみなさん100人が参加され盛大に行われました。地元の子供たちにも呼びかけ、宇佐川小学校、岩国高校広瀬分校自然環境研究部のみなさんと交流会を行いました。10月に愛知県瀬戸市で全国大会が行われ、地元から7人、高川学園から7人が参加しました。その中で、次年度開催が山口県岩国市錦町の宇佐川が正式決定されました。まだまだ、オオサンショウウオのことについてわからないことばかりですので、定期的に、

市の関係者や会員で勉強会を行っています。11月には、全国大会のテーマソングということで、地元の岩国警察署広瀬幹部交番の金子所長が作詞作曲で「オオサンショウウオ応援歌」を作ってくださいました。私が歌手をつとめ、CDを作り、行政、教育機関に配布しました。先日、村田先生の調査を山口放送が取材し、巣穴に特殊カメラを入れて撮影しました。なんと、今年生まれた幼体が確認されました。初めてのことです。放映されましたが、涙が出る思いがしました。

今年10月の地元開催の全国大会に向けて、流域のみなさんに参加していただき、オオサンショウウオの保護活動の一環として川をきれいにし、住みやすい環境にしていこうと思います。皆様のご協力よろしくお願いいたします。

生態系探訪

山口県のヤマネの生活

山口県立山口博物館　田中　浩

巣箱によるヤマネ調査

いまだよく分かっていない動物の生活を調べることは、大変ですが、感動や喜びがあり、辛くもあり、楽しくもあります。私たちが２００８年から続けているヤマネの調査について、わかってきたことを報告したいと思います。

巣箱にやってきたヤマネ

ヤマネ調査地

ヤマネは鼻先から尻尾の先までの全長が約１５センチ、体重約２０グラムの齧歯目（げっしもく）ヤマネ科の小型哺乳類です。世界で日本にのみに生息する日本固有種で、本州・四国・九州に生息しています。１９７５年には国の天然記念物に指定され、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧種、山口県のレッドデータブックでは絶滅危惧ＩＢ類に指定されています。山口県内での生息情報はわずかで、旧市町村の徳山市・新南陽市・錦町・鹿野町・徳地町・本郷村などの山地部で、伐採した木から見つかったり、山間部の人家に入ってきたりと偶然に生息が確認されたものしかありませんでした。

ヤマネはどうしたら生息が確認できるのか。これまで野鳥用の巣箱をヤマネが利用することが知られていました。さらにヤマネが利用しやすいように幹側に出入口を設けた巣箱を設置し、ヤマネの生息確認調査ができることが分かってきました。私たちも、森の中に数十メートル間隔で巣箱を設置し、ヤマネが利用してくれるのを待ちました。

巣箱をあける楽しみ

巣箱は動物たちが自ら選んでくれる空間です。ふたを開けて中を確かめる時はどきどきします。いっぱいに持ち込まれた巣材は何よりの喜びです。中にヤマネがいそうな場合は、まずヤマネが逃げ出さないように軍手で出入口をふさぎます。次に巣箱を取り付けているシュロ縄をほどいて樹から離し、大きな捕虫網で巣箱をおおい、中にヤマネがいるかを確かめます。中にいた場合は、捕虫網から水切りネットに移し体重をはかり、雌雄の確認を行います。必要な場合は軽い麻酔をして鼻先から尾の付け根までの頭胴長や尾の長さ、耳の長さや後足の長さを計測し、速やかに巣箱の中にもどします。

ヤマネが持ち込んだ巣材

巣材をくわえ運びこむヤマネ

自然の中の休み場

巣箱は休み場の一つになりますが、ヤマネが自然の中でどんなところで寝ているのかわかりません。ここと思う小さな樹洞などをみてもヤマネが中で休んでいるところを発見することはできませんでした。巣箱にいた個体の背中にわずか０．９グラムの小型発信機を張り付けて、行動を追跡することにしました。夏、発信機を付けた個体は、かなり高い樹上の枝又の間に寝ているようでした。受信機でとらえることのできる音はかなり強く近くにいることは分かりますが、姿を確認することはできません。また、ある個体はスギの木の高さ5メートル近くある二股に分かれた

スギの木の二股にヤマネがいた

梯子で登り確かめる

ところにいると推定されました。10日近く同じ場所にいるので、発信機が外れたのではないかと思っていましたが、再び移動し発信機がついていることが確認できました。この2股のところがどのようになっているのかを登って調べてみることにしました。枝打ち用の梯子を借りて登ってみると、そこにはヤマネがすっぽりおさまる窪みがあり、スギの樹皮を引き裂いた巣材が詰まっています。その巣材をのけてみると中に丸くなってヤマネが寝ていました。初めて、自然の中でのヤマネの休み場所が特定できました。

ヤマネの自然の巣

巣材をのけるとヤマネがいた

山口県のヤマネの繁殖

ヤマネはどのような子育てをするのでしょうか。巣箱で子育てをしてくれたら子どもの成長や子育ての様子がわかります。２００９年10月、岩国市羅漢山に設置した巣箱で、約１０グラムの７頭の子と母親が確認できました。２０１０年は残念ながら確認できませんでした。やはり、巣箱での繁殖確認は難しいのだろうかと思いながら、２０１１年、周南市長野山で８月～12月にかけて４例の繁殖の確認ができました。８月、生まれたばかりの小さく毛も生えていない約２．５グラムの６頭の子供と母親が確認できました。２０日後の９月には約９グラムになり、動きも活発になっていました。さらに９月には約６グラムの７頭の子供と母親が確認できました。

体重を計測する

ヤマネの子供たち

12月初旬には約９グラムの５頭の子供と母親、約１４グラムの５頭の子供だけの集団の確認ができました。また、11月から12月には、１５グラム前後の単独の若い個体が小さな球状の巣をつくり、巣箱の中で休息しているのが確認できました。これらの個体は離乳後独立した個体であると考えられました。

山口県のヤマネ繁殖は８月～12月で、５～７頭の子供を産んでいました。オスは育児には参加せず、母親のみが面倒を見ていました。子供たちは離乳後母親の元を離れ、兄妹で生活し、その後分散するものと考えられました。

冬眠場所を発見

ヤマネの特筆すべき特徴は冬眠することです。山口県のヤマネはどのように冬眠するのでしょうか。11月～12月に巣箱を利用した個体に発信機をつけ追跡しています。発信機が外れずに、追跡できている個体は１個体ですが、ついに冬眠場所を確認することができました。ヒノキの樹皮の裏側に巣材を持ち込みもぐりこんでいました。現在、ようやくヤマネの生活の一面をとらえることができるようになったと思っています。ヤマネってこんな動物だと言えるように調査を続けていきたいと思っています。

ヒノキの樹皮にもぐりこみ
ヤマネが冬眠

共生随筆

宇部自然保護協会40周年記念企画を終えて
40年から新たな一歩を迎え

宇部自然保護協会（事務局）福場達朗

当協会は1971年9月、当時宇部方式と言われていた「産・官・学・民」共同スタッフで設立された。当初提言した「霜降山の自然保護」と「小野湖の水質保全」は今でも活動の柱となり、霜降山林道計画や小野湖周辺のゴルフ場建設計画の阻止、また宇部湾岸道路におけるヒヌマイトトンボ保全運動など、この40年は様々な活動に取りかかってきた。特に毎年8月の最終日曜日に行う小野湖の清掃作業は今年で37回を数え、今では多くの市民に水質保全の重要性を呼び掛ける活動へと定着してきた。東日本大震災に配慮し、記念式典や祝賀会は自粛し自然保護・環境保全活動の学習会を行うこととした。内容として講演会と意見交換会を行い講演には日本自然保護協会の道家哲平氏に「COP10から2020年へ」～COP10を活用し、地域から生物多様性を加速させよう～と題して講演頂いた。道家氏は国際自然保護連合日本委員会の事務局もされ、昨年10月に愛知県で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）にコーディネーターとして運営にかかわられた。COPとは締約国会議のことで2年に1回目標やルールを決める大切な会議である。生物多様性とは、地球に生命が誕生して気の遠くなる様な時間を経て現在の生命は生まれてきた。その全ての生命は多様なつながりを持っている。私達の暮らしは様々な生命の恵み（生態系サービス）によって衣食住はもちろん医療や産業、文化教育に至るまで自然の恵みに支えられている。しかし利益を求めるあまり自然環境のバランスが壊れ、危機的状況にある。この状況を変えるため作られたのが生物多様性条約なのです。会議にはアメリカを除く171カ国、13000人の方が参加され、名古屋議定書・愛知ターゲット（10年後の方向性を20の目標で定めた）・名古屋クアラルンプール補足議定書が決まった。道家氏は最後に人と自然が共存する社会を作るためにまず自分達が出来ることを行う「にじゅうまるプロジェクト」を紹介された。今回の講演でCOP10を知る良い機会となった。今後、宇部市でも活動が始まる予定があり、協会では身近な活動より自治体や企業に働きかけ、新たな第一歩を歩んでいくことが必要ではなかろうか。

道家哲平　氏（日本自然保護協会）

意見交換会

ヒゼンマユミが大変だ

山口県自然観察指導員協議会第6支部（下関）
平野　正

初耳のヒゼンマユミ、どんなに可愛いマユミの木かと想像しながら蓋井島の現地調査に参加したが、なんと常緑の立派な大木。竹くらいのものに負ける感じがしなかった。ところが、竹がびっしり生えた中に背丈くらいのヒゼンマユミの幼木が生えていた！これではヒゼンマユミは後続が絶たれる。私なりの「ヒゼンマユミは大変だ！」が5年前。

プロジェクトのスタートは、2008年10月11日。県のPRのお蔭で、下関のボランティア団体の参加もあり、参加者は25人。その後私ども協議会主体でボチボチと続け、合計15回88人。（内3回は、悪天候で中止や集合しながらの船欠航など）その成果は、面積で北半分を終了。次回からは、スタートのとき大勢で伐った南半分の入口に戻る。竹の量・密度は、今までより多いと見られるが、焦らずやっていきたい。

山道の下側に生えた木に残っていた実

県の保護指定地がある蓋井島は、下関市吉見から海上約8㎞、船で35分。暖地性のヒゼンマユミが本土にはなく、この島にのみ自生しているのは、僅かながらもこの島の岩を黒潮の一部が洗ってくれているからか？港からヒゼンマユミ保護指定地までは、徒歩で往き1．5時間、帰り1時間強。道の足元は悪いが、山中でもケータイが通じるのは心強い。道中は植物や小さな生き物も楽しめる。

伐った竹は積み上げる

保護指定地内には、倒した古竹の山が見つかる。これらは、指定他の地主さんや有志の方々が伐ったものと聞く。現地調査で案内して下さった先生もそのメンバーだったそうだ。

指定地の地主さん一家も、前はお爺さんお婆さんを含め、今では当主のご夫婦だけで頑張っておられ、私どもと少し離れたとろで伐り跡を少しずつ広げ、やっているなあと意識しつつ、私どもとお互いに楽しんでいる風情が見える。

次回から一泊二日の企画をし、楽しみと効率を兼ねた効果を試してみようとの案が出ており、皆さん多数のご参加をお願いしたい。

ちなみに、今年春季の予定をこの欄を借りて記します。（夏季は休止）

2012年2月18日（土）
吉見港発9：00（帰り吉見港着15：50）
2012年4月21日（土）～22日
吉見港発8：30（帰り吉見港着22日16：25）
2012年5月19日（土）
吉見港発8：30（帰り吉見港着16：25）
（4月の2日間を泊まりで参加される場合、宿予約のため必ずご連絡を！）

連絡先：電話＆FAX
083-258-2706
携帯090-2861-9762
（第6支部長植田高弘）

県内での自然観察に関わって

山口大学大学院農学研究科
東　加奈子

野生動物の保護管理を学びたいと思い山口大学に入学して6年、山口での生活にもすっかり慣れ、卒業論文に追われながらも毎日充実した日々を送っています。

小さいころから生き物が好きだった私は大学生活の間、県内で開催された数々の自然観察会に参加してきました。そしてそこで出会った方々とは生き物の観察を通して様々なお話をしました。参加されている方々は親切で優しく、話好きな方が多く感じます。このような人との出会い、つながりが自然観察を更に楽しくしているのだろうなと感じています。

大学にて私は野生動物の研究室に所属し、研究を行っているのですが、卒業研究を通して得られた経験、野生動物との出会いの感動を普段生き物に関わる機会が少ない方々にも伝えたいと思い、山口市内の小学生とその両親を対象に森の生き物観察会を大学の先輩、後輩たちと一緒に力を合わせて開催しました。いつもは観察会に参加している側でしたが、いざ自分達で開くとなると、とても大変でした。しかし観察会を開催するにあたり、様々な面から物事を見て考えることができ、良い経験になったと思います。子供たちは元気一杯、一生懸命生き物を探してくれました。

学生達で開催したイベント風景

そして一緒に参加してくださった保護者の方々も、普段は気にも留めないであろう草花や虫などをじっくり観察されていました。身近にある自然について、例えばスギとヒノキの見分け方など…小さなことを一つ一つ知ってゆくだけで、自然への興味がずっと深まるのだろうなぁと観察会を通して感じました。

県内での自然観察に関わって感じたことは、県内の自然に興味・関心を持つ方々や生き物の保全に関わる方々は小さな子供から大人まで、世代ごとに多かれ少なかれ県内各地にいらっしゃるということです。しかし、生き物に関わりたい。でもどのように関わっていけばよいかわからない。と思っている方が既に活動を行っている団体の方を知る、または交流する機会。そして活動を行っているそれぞれの団体が知り合い、情報交換を行う機会は少ないように思います。このような機会を設け、更に、日ごろ生き物に関わる機会の少ない方々にも山口県の自然のすばらしさを知っていただく機会があれば、山口県の豊かな自然を守ることに繋がるのではないかと私は感じています。

観察会で設置したカメラに写ったテン

冬こそ温暖化対策

山口県地球温暖化防止活動推進センター
大森一世

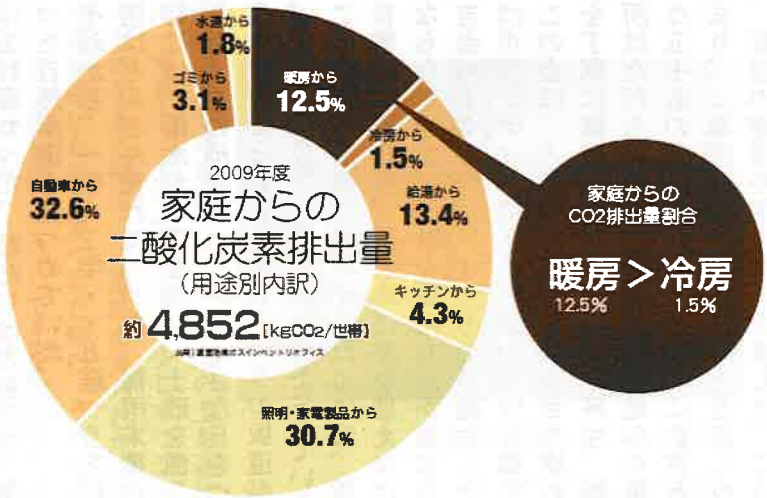
共生をご覧のみなさま、あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いします。

さて「温暖化対策、何かやっていますか？」と聞くと、「クールビズ」や「みどりのカーテン」といった夏の対策はよく聞くのですが、冬の対策となるとあまり意識されていないのではないでしょうか。（寒いから少し温暖化してよ～といった声もチラリホラリ？）

夏は気温・室温が高く、自然と「温暖化」という言葉が連想されやすいために、みなさん省エネ対策などに気をつけられるのですが、実は、温暖化対策は冬こそ大切なんです。

下のグラフは、平均的な家庭から出る二酸化炭素の割合を示したものですが、冷房よりも暖房の方がはるかに多く二酸化炭素を出していることが分かると思います。夏は冷房を使わないよ～という方もたくさんおられますが、冬に暖房器具を使わないという方は少ないと思います。

また暖房以外では、自動車・給湯・照明などからの排出も高い割合を占めています。



冬は夏に比べて、外気温が低いために車のエンジンの暖気やお湯を沸かすエネルギーが多くかかります。また日照時間も短いために照明を使用する時間が増えます。

こういったことから、夏よりも冬にエネルギーを沢山使うため、実は冬こそ温暖化対策に力を入れる必要があります。

では、冬の温暖化対策は？となりますが、その方法はテレビや新聞など、いろんなところでご紹介されていますので、私からはひとつ視点を変えた対策をご紹介します。その対策とは「おしくらまんじゅう」です。

みなさんも子どもの頃、冬にやった経験があると思いますが、あの遊び、実はとっても理にかなっているのです。人間一人当たりの発熱量は約１００Ｗと言われています。例えば４人で「おしくらまんじゅう」をやれば、４００Ｗの発熱量であり、これはこたつと同じくらいの熱量です。

これから冬本番。もし学習会などをやるときがあれば、ぜひ「おしくらまんじゅう」を取り入れて下さい。体も温かくなりますが、心もほっこりすること間違いなしですよ。

秋吉台自然歩道の修復から学んだこと

秋吉台パークボランティアの会
庫本　正・木島忠與

美しい草原美を見せる秋吉台で、恥ずかしいものがいっぱいあった。沢山のハイキング客の歩く歩道が河原を歩くような石ころだらけのガタガタ道。なんとかならないか・・・。

妙見原から長者が森に至る歩道は、今では中国自然歩道になっている。しかし、昔は秋吉台の幹線で、県道だった。観光バスや定期バスまで通っていた。それが自然歩道に変わったのは、秋吉台の有料道路が完成し、こちらは町道になってからである。

自動車も通った

秋芳町には町営の放牧場があったため、牛の輸送道路として維持された。やがてこの道が中国自然歩道に指定されたことから、ハイキング客の楽しい自然歩道になった。

山口県は、平成五年に秋吉台で全国自然公園大会を開催することになり、荒れていた自然歩道を大枚の金をはたいて大規模な修復をおこなった。荒れた自動車道が立派な自然歩道に生れ変わった。私たちは大喜びで、生き返った自然歩道を見つめていた。

それから、一年、二年・・と経つうちに再び道はどんどん荒れていった。梅雨末期の豪雨時には、雨水が歩道を流れ、土砂を激しく流した。この歩道のコースは小さな丘をつなぐようにできており、登り下りの坂道が多い。だから日常的に道が雨で侵食されていた。

この歩道を普通に維持するためには、誰かが日常的に見守り、こまめに手を加えなければならなかった。これを機に有志が集まり、秋吉台パークボランティアの会が誕生した。会はボランティアによる公園の見守り隊だ。

この会は、人類の宝である秋吉台の壊れた所を丁寧に修復し、裸地には緑を再生、壊れた所はただちに修復する。県内各地から集まった五十名の会員が月二回定期的に秋吉台に集まり、「草原のお医者さん」と自認しながら、草原の修復や再生に汗を流した。こうして秋吉台の修復作業が始まった。

なかでも、一番苦戦をしているのが、最初に述べた中国自然歩道の修復だった。最初は傷んだ歩道を石灰石のバラスや赤土でならし、水が流れないよう側溝を開いた。油断をすると雨水が土砂を流すので、私たちは気配を見て現地に行き、溝がつまらないように努めた。こまめに手を入れると、歩道は目に見えて良くなっていった。

次の段階は、歩道が広くなっているところを、必要な歩道部分だけを残し、余分な所を草で緑化することにした。とりあえずシバを植えて、将来は在来の植物を導入することにした。今では、この段階を何とかクリアーできた。

土入れ

シバ植え

第三段階は歩道がシバなどの草で覆われ、本来の秋吉台らしい歩道になることを目指した。秋吉台の土は石灰岩の溶けかすだ。この土は赤褐色で美しい。私たちが歩道の修復に使う土は、石灰石の採石場で集められた石灰石の残留粘土だった。

植物はよい土壌（土にバクテリアや動物、植物が活動して土壌ができる）に生える。赤土は生物の力で植物の生える土壌に少しずつ変わってゆく。土壌が変わると、それに応じて生える植物も変わって行く。

赤土を入れると、最初に生えるのはヘラオオバコやセイヨウミヤコグサなどの帰化植物だった。

道の作業

道端の刈り草を道に入れ、側溝の土を道に返した。すると、土壌ができて、少しずつシバやスミレの生える植生への遷移が見られた。スミレの花が咲いたのを見つけた時は、うれしくなってうきうきした。こうして土を流さず、土壌を育てながら、路上の植生が秋吉台本来の植生に近づくのを待ち続けている。

秋吉台の自然歩道の植生は、人が適度に踏みつけるので、ノシバが覆う植生になっている。妙見原から長者が森間の歩道は草刈りの車が通るので、車の両輪のとおる場所は草は生えにくい。

自然は、地球がつくり出した原材料（岩石：鉱物、大気、水、土など）をもとに長い時間をかけて、沢山の生物たちが係わって大気や地下水、土壌などを造りだし、この環境に適合した生物たちを生みだしたてきた。この環境に適応したものだけが生存できる。人類だって同じ生物だが、自分で環境を作りかえることができるので、自然の異端者だ。

作業の休み時間には会員がつくってきたお菓子とおいしいコーヒーを飲みながら、自然のことを議論したり、観察したりしている。結構楽しいひとときだ。ここで、活動をどう進化させるかも議論した。目に見える成果を確認し、更に私たちにできることを積み重ねている。

やがて、エコツアーが始まった。十三年も秋吉台の自然を学んできたので、全員自然観察のベテランで、エコツアーのインタープリターだってできるようになっていた。こうして何よりもすてきな風の中で自然を楽しみ、ヒトに役にたつことをやっている。

萩でムササビとご対面！
とっておきのムササビ観察会のご案内

萩博物館学芸員　椋木博昭

ムササビは、ネズミ目リス科に属する日本固有種で、飛膜を使ってグライダーのように１６０ｍもの距離を滑空できる哺乳類です。ムササビを知らない人は少ないでしょうが、野生のムササビを見たことがある人も少ないのでないでしょうか。

ムササビは深い山の特別な所にすんでいると思われがちですが、意外と身近な所にもすんでいて驚かれることがあります。それは、ムササビが警戒心が強く、昼は樹木の洞などにじっと隠れ、夜にならなければ活動しないためでしょう。しかし、いったんムササビの巣を見つけることができれば、その生きざまを垣間見ることは案外難しくありません。

ムササビの巣を見つける方法は意外と簡単です。これは野生の哺乳類を調査する上でごく基本的な技術ですが、彼らの生活環境の保護のため、特に興味のある方で、後でご案内する観察会に参加される方にだけ、特別に伝授することにしたいと思います。

さて、萩博物館では、萩市内のとある場所にムササビの巣を発見して以来、その行動を観察してきました。やがて、このムササビが巣穴から出て木の上部に登り、滑空する時間帯が決まっていることが分かってきました。そこで、満を持して２００９年３月、この類のご専門の山口県立山口博物館の田中浩学芸員を講師に迎え、萩で最初のムササビ観察会を実施しました。

当日、多くの参加者がある木の下で、ムササビが巣穴から出てくるのを心待ちに待っていました。ところが、ちょうどそのころ萩市では選挙がおこなわれており、選挙カーが大音量と共に付近を走り去ったため、定刻となってもムササビは出てきません。そうして30分が過ぎ去ろうとした時、突然、一部の参加者から歓声が。ムササビがビュ～ンと滑空して登場したのです！ 実はこのムササビは、時間帯をずらして違う巣穴から出てきたのでした。そのため、実際にムササビの姿を見ることができたのは参加者のごく一部だけ。選挙とムササビの警戒心がもたらした、忘れられないハプニングでした。

そこで、今度こそ参加者全員にムササビが空を飛ぶ雄姿を見ていただきたいという願いを込め、来る３月にリベンジ企画を開催したいと思います。ムササビは身近な所にもいると冒頭に書きましたが、実際に生息している

のはごく限られた環境です。その環境とは？その理由とは？・・・あなたのその目で確かめてください。ムササビがすむ環境や巣穴の見つけ方が分れば、今度はご自身の町でムササビを見つけられるかも。ムササビとの距離がグ～ンと近づく、とっておきのチャンスです。ふるってお申し込みください。

『とっておき企画！萩でムササビとご対面』
日時：２０１２年３月24日（土）17時～20時
集合場所：萩博物館講座室
講師：田中 浩 先生（山口県立山口博物館学芸員）
定員：20名（先着申込順）
内容：講座室で田中先生からムササビの生態などをご紹介いただいた後、全員で生息地に移動して観察します。
その他：寒さ対策をしっかりとしてきてください。観察用の懐中電灯をお貸ししますが、ご自分のものを持参される方はライトの前に赤いセロハンを貼りつけてきて下さい。
参加方法：氏名・住所・年齢・参加人数・連絡先を萩博物館までお知らせください。
電話：０８３８-２５-６４４７
FAX：０８３８-２５-３１４２
E-mail：muse@city.hagi.lg.jp

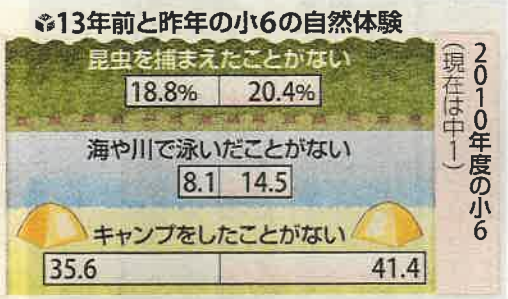
少し冒険「危ない」体得
（新聞の記事から）

広報担当　内田　修

平成２３年12月５日付けの読売新聞に「学び再出発　生き抜く」という特集記事が掲載されていました。記事では冒頭、ＮＰＯ法人の自然体験学習の紹介の後、東日本大震災後に文部科学省が設置した防災教育の有識者会議での群馬大の片田敏孝教授の発言「最も優先すべきは、人が死なないことだ。その視点が欠落している」を紹介していました。この発言は、災害が起きたときに、自分で危険を察知し逃げる、救援が来るまで周囲と協力して生き抜く。学校はその力をつけさせようとしていないという危機感からの発言だそうです。以下記事をそのまま紹介します。

「体験を重視し生きる力を育てる」と唱えるが、危険なことはさせない。文部科学省も学校もそうしてきた。野球、サッカー、ブランコの立ちこぎ、滑り台の逆のぼり…。放課後の校庭で10項目を禁止する小学校もある。かすり傷でも「なぜすぐ知らせない」と怒る、「危ないから滑り台を撤去して」と求める。そんな保護者が少なからずいることも影響している。

小学生の２割は昆虫を捕まえた経験が、４割はキャンプをしたことがほとんどない。11月、そんな調査結果を国立青少年教育振興機構が公表した。文科省調査などでも、外で遊ばない子が増え、転んだ時手をつくことができず、鼻の骨を折る、顔に飛んで来るボールをよけられないなどの例が目立つことがわかっている。



文科省は、ようやく動き出した。来年度から、小中学生が地域の人と学校に１、２泊する「防災キャンプ」を試験的に始め、災害時に子どもが生き抜くための教育に乗り出す。キャンプでは、水道やガス、電気を使わず、夜は体育館や校庭にテントを張って寝る。「大人が見守り、小さな痛みを体験させることが、危険を察知し、自分で判断できる力を育てる」安全教育に詳しい松岡弘大阪教育大名誉教授の指摘だ。（中略）11月の調査を担当した千葉大の明石要一教授は「自然や人との関わりが薄れると社会性が身につかず意欲も高まらない。意識して機会を提供することが必要だ」と話す。（後略）

うちの子はどうだろう？いざという時に自ら考え行動できるだろうか？自然豊かな山口県みに住みながら、昆虫採集は少しあるものの、キャンプはしたことがない。今年は色々な経験をさせよう！と考えさせられる記事でした。

やまぐちの自然景観整備事業

山口県環境生活部自然保護課

山口県では、県内の優れた自然資源を再発見し、気軽に親しんでいただくことが出来るように、自然公園等における、希少な山野草の自生地や、渓谷・滝、山について、草刈りや支障木の除去、散策路の整備、案内板の設置等を行うとともに、それらの優れた自然景観を県のホームページで広く紹介することとしています。

事業実施箇所は下表のとおり、山野草の自生地等の散策路整備が11箇所、渓谷と滝の探訪路整備が16箇所、登山道の整備が33箇所の全60箇所です。

既に整備がほぼ完了している箇所もありますが、全箇所の完了は3月末の予定です。

安全、快適に自然景観を楽しんでいただけるよう整備する予定ですので、是非お出かけ下さい。

十種ヶ峰／ヤマシャクヤク

岩国市／霧降の滝

山野草の自生地等の散策路整備　11箇所

番号	市町	名　称
1	岩国市	寂地山／カタクリの花
2	岩国市	羅漢高原湿地植物群落
3	岩国市	らかんミズバショウ
4	光市	牛島／モクゲンジ
5	周南市	長野山緑地公園／ササユリ
6	山口市	十種ヶ峰ヤマシャクヤク自生地
7	美祢市	二反田溜池の湿地植物群落／かきつばた
8	下関市	角島夢崎ハマユウ群生地／はまゆう
9	下関市	角島ダルマギク群生地／ダルマギク
10	長門市	二位の浜ハマオモト（ハマユウ）群落
11	萩市	明神島運動公園のササユリ

登山道の整備　33箇所

番号	市町	名　称
1	岩国市	小五郎山
2	岩国市	右谷山
3	岩国市	羅漢山
4	岩国市	鬼ヶ城山
5	周防大島町	文珠山
6	周防大島町	嘉納山
7	周防大島町	源明山
8	周防大島町	嵩山
9	周防大島町	白木山
10	上関町	皇座山
11	光市 田布施町	石城山
12	下松市	摺鉢山
13	下松市	白浜山
14	下松市	小深浦山
15	下松市	高壺山
16	下松市	尻高山
17	周南市	太華山
18	山口市	十種ヶ峰
19	山口市	愛鳥林
20	山口市	東鳳翩山
21	宇部市	霜降岳
22	下関市	竜王山
23	下関市	華山
24	下関市	狗留孫山
25	長門市	千畳敷へき千年の森
26	長門市	二井ノ浜遊歩道
27	長門市	高山ながと千年の森
28	長門市	高山
29	長門市	生島(いかしま)みすみ千年の森
30	萩市	指月山
31	萩市	笠山
32	萩市	高山(磁石石)
33	阿武町	遠岳山

渓谷と滝の探訪路整備　16箇所

番号	市町	名　称
1	岩国市	寂地峡五竜の滝
2	岩国市	木目の滝
3	岩国市	宇佐大滝
4	岩国市	宇佐小滝
5	岩国市	深谷峡
6	岩国市	深谷峡河川争奪・侵食地形
7	岩国市	宇佐郷河川争奪地形
8	岩国市	霧降の滝
9	岩国市	木谷峡
10	光市	夕日の滝
11	周南市	高瀬峡
12	山口市	観音の滝
13	美祢市	薬王寺の滝
14	美祢市 下関市	石柱渓
15	下関市	徳仙の滝
16	萩市	扇落滝

周防大島町／文殊山山頂

祝　表彰

ネットワーク会員の皆さまの長年にわたる地道な取組が評価され、次のとおり表彰を受けられましたのでご紹介します。

第12回やまぐち県民活動パワーアップ賞

（趣旨）平成12年度にやまぐち県民活動支援センターのオープン1周年を記念して創設された知事表彰であり、毎年5団体等を表彰している。コミュニティ活動、ボランティア活動、NPO活動などの県民活動のうち、先駆的なもの、地域性に富んだものなど、特に優れた活動を行う団体等を表彰し、幅広く紹介することにより、県民活動をさらにパワーアップするとともに、魅力と活力にあふれた地域づくりを促進し、「住み良さ日本一の元気県づくり」をめざす。（表彰日　平成23年11月15日）

○本山会（もっとやろうかい）（山陽小野田市）

・活動内容　竜王山の自然保護活動

地域のまちづくりビジョン「自然と歴史を活かしたふるさと創造」に基づき、地元自治会・小学校と協働して、竜王山に自生、生息するモリアザミやヒメボタルの保全活動を行い、竜王山の魅力を発信する工夫を行っている。

平成23年度（公財）やまぐち県民活動きらめき財団理事長表彰

（趣旨）過去5年以上にわたり、ボランティア活動、NPO活動、コミュニティ活動等の県民活動を行い、又は支援し、地域福祉をはじめとした自主的・主体的な県民活動の推進等に寄与した団体、又は個人を表彰。平成23年度は、団体の部で18団体、個人の部で20人を表彰。（表彰日　平成23年11月28日）

○NPO法人ふるさと里山救援隊（周防大島町）

・活動内容　里山（棚田）の再生活動

○柳美実践クラブ（柳井市）

・活動内容　環境美化活動

平成23年度環境保全活動功労者表彰

（趣旨）多年にわたり環境保全、環境学習、地球温暖化対策及びリサイクル等に顕著な功績があった個人、事業所及び団体に対して、表彰状の授与を行う。また、「環境保全、リサイクル、省資源・省エネルギー絵画・ポスター」と「緑のカーテンコンテスト」の最優秀賞受賞者に対しても、表彰状の授与を行う。（表彰日　平成23年11月28日）

○塚本司郎（岩国市）

・活動内容　「錦川の自然を守る会」等の活動団体を設立し、地域の環境保全及び自然保護活動を実践

※平成22年度の総会でやまぐち自然共生ネットワーク会長表彰を受賞されています。

地域環境保全功労者表彰（環境大臣表彰）

（趣旨）地域環境の保全または地域環境美化に関し、顕著な功績のあった者（団体を含む）に対し、環境大臣がその功績をたたえるために表彰を行う。（表彰日　平成24年1月18日）

○秋吉台パークボランティアの会（美祢市）

・活動内容　秋吉台の自然を守るため、長年にわたり大理石採掘場跡地など裸地となった場所の緑化や自然歩道の修復など、秋吉台の修復・再生活動を実施し、山口県の環境保全に貢献

平成23年度山口県花いっぱい運動

（趣旨）花を育て花に親しむことを通して、環境の美化、青少年健全育成、地域連帯感の醸成などの地域づくりに顕著な功績のあった団体及び個人を表彰し、花いっぱい運動の一層の推進を図る。

○つくしの会（防府市）

表彰を受けられた皆様方おめでとうございます。

表彰記念樹贈呈

5月21日（土）、コアプラザかので開催した総会において、山口県の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐことを目的とした自然環境保全活動に顕著な功績のあった徳重さんを表彰したところですが、1月12日、副賞の記念樹「シラカバ」の苗とプレートを贈呈しました。

贈　記念樹（シラカバ）

徳重 博一 様

あなたは、長年にわたる継続的な情熱と努力により、広大な私有地に一万本以上の木の植栽と見学者への公開に努め、自然環境保全実践活動に精励されました。
よって、ここに記念樹を贈り感謝の意を表すとともにその功績を讃えます。

平成24年1月吉日
やまぐち自然共生ネットワーク会長　開村 修三

お知らせ

新規会員募集中！

1月末会員数は、個人会員111名、団体会員51団体です。山口県の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐためには、いろいろな団体や個人が情報交換しながら連携していくことが大切です。近所やお知り合いの方に声をかけ、ネットワークの輪を広げましょう！

また、やまぐち自然共生ネットワークの趣旨に賛同してくださる賛助会員（企業）を募集しています。ぜひ声掛けをお願いします。

愛称募集中！

「やまぐち自然共生ネットワーク」は、山口県の豊かな自然を次世代に引き継ぐために、自然に関わる活動をしている団体及び個人がネットワークを形成し相互の情報交換や自然の保全等の活動を強化し、より一層促進するため、平成16年7月に設立され、今年で丸7年を迎えました。ネットワークの輪をさらに広げるために、呼びやすく、かつ親しみのある、愛称を募集します。事務局宛にどんどん意見をお寄せ下さい。お寄せいただいたご意見のなかから理事会で愛称を決定させていただきます。

編集後記

昨年は記憶に残る大きな出来事に関わる機会を与えていただきました。まず、3月11日に発生した東日本大震災。未だに多くの人が避難生活を送られています。平凡な生活が送れることのありがたさをつくづく感じました。そして、山口国体、全国障害者スポーツ大会。会員の皆さまも花いっぱい運動や応援、おもてなしなどで関わられたのではないでしょうか。山口県民のパワーに感動しました。日々の暮らしに感謝し、自分にできることを一生懸命やっていきたいと思います。

執筆いただいた皆さまには心よりお礼を申し上げます。

皆様のご意見、投稿をお待ちしています。

広報担当　内田